

心理学分野における学際性

副島 將

近年、社会における問題が複雑化し、それに対応できる学際的な研究に関心が集まっている。

心理学は、人間や動物の意識・行動を扱うため、学際性が高いと推察されている分野のひとつである。しかし、客観的な指標に基づいて、心理学分野の学際性を示した研究は少ない。本研究では、複数の指標を用いて、心理学の下位領域である教育心理学、社会心理学、臨床心理学、発達心理学を対象に、各領域ならびに領域内の雑誌の各学際性を計測した。

論文の「学際性」に関しては様々な定義が存在するが、本研究は著者の専門分野の分布に着目し、その多様性と偏りをもとに学際性を算出した。その際、論文のデータについては CiNii を、論文の著者（研究者）のデータについては Researchmap を情報源として利用した。また、CiNii Books において所蔵図書館数が多い雑誌をコアジャーナルと見なし、分析の対象とした。

コアジャーナルの論文ごとに著者情報を付与していき、雑誌ごと・領域ごとに、著者の専門分野の多様性（異なり数）、及びその偏り（ジニ係数）を算出した。その結果、領域単位の比較をした場合、異なり数とジニ係数は反比例の関係（異なり数の大きいものはジニ係数が低く、ジニ係数の高いものは異なり数が小さい傾向）にあり、臨床心理学が異なり数・偏りの両観点から見ても学際性が高く、発達心理学が最も学際性が低い事が判った。ただし、社会心理学だけはこの傾向からやや外れた位置にあり、その特異性が明らかになった。

また、雑誌単位で比較した場合、教育心理学ならびに臨床心理学は領域単位の比較と同様の傾向を示したが、社会心理学は全く異なる傾向を示した。

本研究では心理学の下位領域として、教育、社会、臨床、発達の上四領域を選択したが、他の下位領域を調査することによって、領域ごとの特色の更なる明確化が期待できる。

また、心理学以外の分野についての調査を行い、比較することによって、心理学特有の傾向に示唆を加えられる可能性がある。

加えて、学際性の算出における著者情報の調査手段として、Researchmap からの機械的取得を選択したが、一人として専門分野が判明している著者がいない論文が半数ほどに登るなど、研究者情報の特定精度にはまだ向上の余地がある。

今後の展望として、別途の研究者の専門分野を割り出す方法と、異なる学際性を測る指標による、更なる学際性の傾向の明確化が期待できる。

(指導教員 芳鐘 冬樹)